



Title	ロジャー・フライの批評理論：知性と感受性の間で
Author(s)	要, 真理子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42208">https://hdl.handle.net/11094/42208</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	かなめ 眞理子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第15911号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	ロジャー・フライの批評理論 —知性と感受性の間で—
論文審査委員	(主査) 教授 神林 恒道
	(副査) 教授 上倉 庸敬 教授 玉井 暉 助教授 藤田 治彦

### 論文内容の要旨

本論文は現代のフォーマリズム批評の原点と見なされている。ロジャー・エリオット・フライの批評理論を、その核心をなすフォーム概念がいかに形成されていったか、その思想の変遷を歴史的にたどるとともに、総合的にフライの批評理論がどのように評価されるべきであったかを論じたものである。本論の構成は全体で六章からなっている。

第一章「フライ思想の変遷」は、先行研究がフライの批評理論をもっぱら「フォーマリズム」という視点からのみ論じてきたのに対して、その思想の変遷をより包括的な見方に立って批判的に捉え直そうとする。そこで第二章「フォーム概念の成立」において、論者はフライのケンブリッジ時代の交友関係に着目し、その批評言語の形成のヒントをバートランド・ラッセルの論理学の内在的分析の方法に探し出そうとする。第三章「ヴィジョン概念の変遷」では、「フォーム」がそこに成立する基盤として、フライが「ヴィジョン」と呼んでいる「みる」という本質的な行為について考察がなされている。第四章「フォームの質」では、この「みる」ことの関わりにおいて対象化される「フォーム」の質が、これまでの先行研究のように造形的な局面からだけでなく、同時に心理的な局面からも改めて検証されている。第五章「感受性の論理」では、この第四章の議論をさらに発展させて、フライが「フォーム」以外の作品のテクスチャーやデザインといったより具体的な要素に注目していたことが明らかにされる。論者はそこに、芸術批評を可能にするフライ独自の「感覚の論理」が根拠づけられるのだと主張するのである。第五章まで論者はフライの言説をとらわれない視点から再検討することを通じて、フォーマリズムというこれまでほとんど固定化してきた枠組みを越える、新たなフライの批評理論の解釈を展開してきた。これを受けた最終章の第六章「社会的側面」は、ひたすら純粹芸術の擁護者と見られてきたフライが、実は生活と芸術の結合という社会的な関心を持ち続けていたのだということを、フライ自らの主張と当時のイギリスの美術界の状況とを相互に照合させながら明らかにしようと試みている。

### 論文審査の結果の要旨

近年ロジャー・フライの批評理論についての関心が高まりつつある。その研究の多くは、現代アメリカのフォーマリズム批評の原点をフライの理論に認めようとするものであり、さらにはヴェルフリン、フィードラーらの純粹可視性の理論の歴史的な文脈に、この批評理論を組み込もうとするものである。論者はフライを一面的にフォーマリスト

という限定された枠組みで論じてきた先行研究を批判し、これらの研究があえて無視あるいは排除してきた時期の理論を柔軟な視点から整合的に読み解くことによって、フライの批評理論をオーガニックな全体像として浮かび上がらせる成功に成功した。それはフライのフォーム概念をラッセルの関係性の論理と重ね合わせることによってもたらされた、かつてない新たな解釈であり、知見であると評価することができる。

さらにフライの批評理論をこれまでのフォーマリズムという教条主義的な解釈から救い出すために重要なポイントとなったのが、論者の偏らない視点からなされた「ヴィジョン」についての綿密な分析である。この再検討によって、従来のフライ解釈から抜け落ちていた、エモーショナルな心理的な局面が解明された。それは同時にフォームのフォームである「significant form」の理念的な意義を明らかにするものともなった。

フライが近代美術史に名前を留めているのは、その批評活動と連動するかたちで「ポスト印象派」の展覧会を組織したことによる。この企画を通じて、印象派への厳しい批判と、「ポスト印象派」の芸術についての評価という、相対立する二極構造からなるフライ独自の近代芸術観が浮かび上がってくる。論者は今なお影響力を残すこのモダニズム解釈が、フライの批評理論の根底に想定した「感受性の論理」といかに相互に対応するものであったかを確認しようとしている。この試みによって、理論と実践の二面から批評家ロジャー・フライの実像が過不足なく浮彫りされている。

本論文を全体として眺めるとき、良く言えば周到な配慮をもって書かれた論文であるとも言えるが、多方面に論者の意識が拡散してしまい、最終的に結論をどこに導こうとしたのかが今ひとつつかみにくいところがある。第六章は第五章までの分析と解釈の正当性をサポートする意図で書かれたものようであるが、むしろその主張を曖昧なものにしてしまっている。しかし先に述べた、この論文の研究成果は、これらの不備を補って余りあるものであると言うことができる。よって本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。